

22 遊女墓の由来^{じゅり}

辻のある遊廓にね、女の人がね、この、恋に破れてね、失恋をしたということでしょうね。失恋をして、自分でまあふらつとして遊廓を出てね。今の沖繩市のね、山内という、諸見というところがあるんですよ。というところの竹林にこの女の人がね、遊女がね、着いて、結局は首つりをしてしまったと。失恋の余りにね。ふらふらと歩いて、今の中部のあたりで、この竹林でね、首つり自殺をしてしまった。

そして、幾日かたつてしまつてね、白骨化したわけですよ。そして、ちょうど白骨になった時点ですね。三月の季節になつてね、この竹藪の筍がね、もうぐんぐんと伸びてね、伸びるわけですよ。雨後の筍と申しますよね。その筍がうんと伸びてね、この頭蓋骨をね、突き刺してね、ぐんぐんこの竹が伸びてしまつてね。もう、一メートルにも、二メートルにもなつたんでしょうな。それがね、ちょうどこの、沖繩の言葉

で、「こち」というのがね、東北。あれ、「こち」というんですよ。あの、よくあるでしょう。『こち吹かば匂いおこせよ梅の花』ってあるでしょ。あの「こち」ね。東北の「こち」。その風がちよつと荒れてね。こうどんどん吹くとね、この頭蓋骨が筍に刺さつて、そのままずつと伸びてしまったから、急にね。こち吹いた風がね。するともうこれでね、頭が痛かつたんですよ。

それでね、夜中ね、ここ通るところに、みんなこのことを、竹林の寂しい、ちよつと怖いところだからね、村人がちよつと敬遠していたところですよ。そこでね、女の方がよ、この遊女がよ、この頭骸骨がこちの風に荒らされてね、こうふらふらしているのを歌にしてね。幽霊の歌があつたんですよ。伝説だから。その幽霊がね、『こち風吹かば、みちぶるぬやぬい。さんかみじなりや、あんがあゆら』と。沖繩の言葉ですよ。風がね、こちの風がね、風が吹くとね、頭が痛いよと。

『さんかみじなり』というのはね、沖繩では洗骨というのがあつたんですよ、ずっと前まではね。私たちの青年時代までは洗骨というのがあつた。その洗骨とい

う時にはね、洗骨は洗うんですよ。洗って。洗ったのを甕でちゃんと納めると、足下からずつと頭にね、甕にちゃんと、骨甕に入るようにして。お酒で清めてね、ちゃんと洗骨したんですよ。戦前はね。私たち、青年時代までは。

そこでね、この歌を歌うんですよ。時たま。そして村人が聞いてね、びっくりして。『こち風吹かば、みちぶるぬやぬい。さんかみじなりや、あんがあゆら』といったら、『洗骨してね、洗骨して洗う時にはそんなに痛いものかなあ』という歌をね、この幽霊が歌って、歌ったんですよ。

そこで、村人はもう騒動になつてね、

「これはたいへんだ」。日頃はもう立ち入りもね、寂しいところで怖いところだから、立ち入りも出来ないところだから、みな敬遠しているところだからね。そこでみんな、意地がある人、勇気がある人がね、

「やあ、行こうよ。何とかしないといかんよ」と言つてね、村人の青年たちを呼び集めてね、みんなで行つて調べてみたらいいんだな。そして、ここに白骨があつたと。そして、この頭蓋骨がね、筈のここにちよ

うど突き刺さつてね、もうぐんぐんと伸びてしまつてね。この頭蓋骨がもう、しゃれこうべがもう踊つてね、いるからね。それを見てもうびっくりしてね、

「これはたいへんだ」と言つてね、みんなでもう、村の方々全部、みんな情け深いところだからね、みんなで寄り集まつてね、お墓を立てたんですよ。そして、みんな、村人が全部でね、この供養をしてね。ちゃんとお経をあげて、みんなで手を合掌して。したらね、その後からはこの歌声が聞こえなくなったというんですよ。

村人が情けによつて、ここにちゃんと葬つてね、みんなで手を合わせて拝んだからそういつたことがなくなつたというね。今も竹林塔といつて沖繩にはね、この山内にはあるんだというお話なんですよ。

字糸満 野原由宗